第5章　総　括

第1節　庄・蔵本遺跡一帯における弥生時代前期墓制の検討

は　じ　め　に

庄・蔵本遺跡一帯では，これまでの調査によって，弥生時代前期の墓域が複数確認されている。本書で報告したボイラータンク地点（1998年度立会），第22次調査地点（西病棟新営その他電気設備地点）はその一部である。そのほか，徳島大学蔵本キャンパスの南東部に位置する第6次調査地点（青藍会館地点）（徳大埋文，1998），同キャンパス南側に位置する南蔵本遺跡住宅開発工事地点（勝浦，1999），東側に位置する南蔵本遺跡県立中央病院地点（徳島県教委・徳島県埋文，2014）をあげることができる（図5-1）。

第6次調査地点では，石棺墓1基，石蓋土壙墓1基，配石墓13基，土壙墓6基，甕棺墓1基が確認されている（図5-2）。これらの所属時期は，弥生時代前期前葉～中葉に収まり，墓の多くは，主軸方位をほぼ東西にそろえて，列状の墓域を形成している。石蓋土壙墓，配石墓や土壙墓の一部には，刳り抜き式木棺が使用された可能性がある。墓からは，副葬品とみられる土器・管玉・石鏃などの遺物が出土している。これらの墓の系譜については，これまで各氏によって，響灘沿岸地域，石棺墓については朝鮮半島中西部（北條，1998a），北部九州・響灘沿岸地域（中村，1998），北部九州（橋本，2001）といった地域の墓制に求める見解が提出されている。

庄・蔵本遺跡に隣接する南蔵本遺跡の住宅開発工事地点では，墓の可能性をもつ土坑や甕棺墓が確認されている（図5-3）。これらは弥生時代前期初葉～中期初頭に属する。同遺跡の県立中央病院地点で検出された，弥生時代前期前葉～末葉の土坑のなかにも，墓の可能性のあるものが含まれているようである（図5-4）。

本書で報告した通り，1998年度立会調査地点，第22次調査地点でも，こうしたものに類する弥生時代前期初葉～中期初頭の墓が数基確認されている（図5-5）。このうち，第22次調査地点については，概報が刊行され，そこから出土した横型流水文土器に，庄・蔵本遺跡と近接する三谷遺跡，さらには列島東部との関係をみる見解（中村，2010）も提出されている。

こうした墓域あるいは墓制が，当時の社会・文化を理解するうえでの有益な資料となりうることは言うまでもない。筆者はいちど，これらを取り上げ，その系譜と背景にある社会像を論じたことがある（端野，2017b）。しかし，紙幅の都合上，事実関係の詳細を提示し得ず，自論の概要を述べるにとどまった。そこで，ここで再論することとする。

1．墓制の実態

ここで分析の対象とするのは，先述の5地点で得られた資料に加え[註1)]，第27次調査地点（立体駐

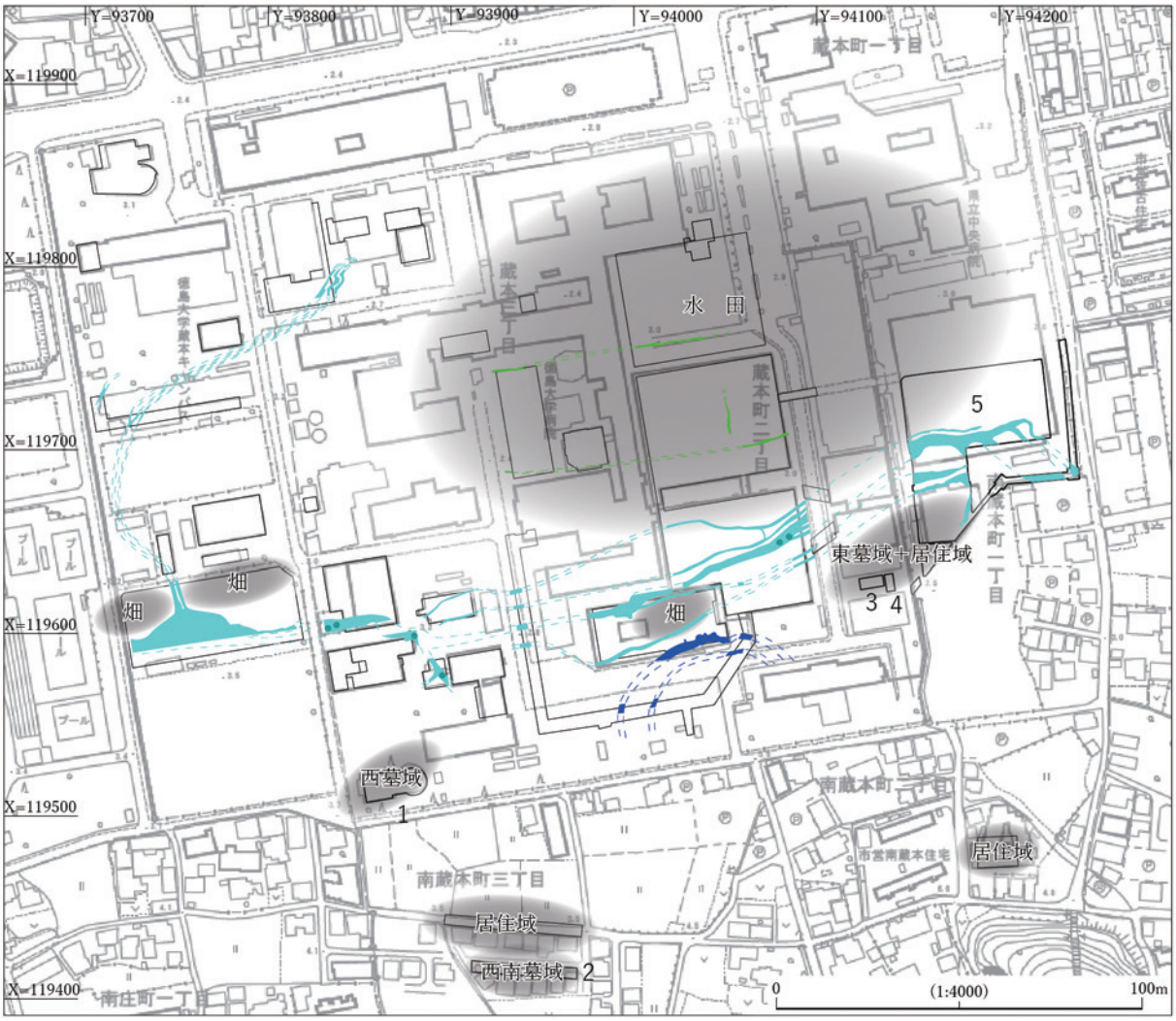


図 5-1　弥生時代前期前葉～中葉における庄・蔵本集落一帯の様相

この地図は，徳島市長の承認を得て，1/2,500 地形図を複製したものである。（承認番号　平 29 徳島市指令都政第 828 号）

車場地点）（端野ほか，2015）で検出された，甕棺墓の可能性がある S1843 である。第 6 次調査地点の資料は，基本的に報告にもとづくが，一部，実測図の原図より得た情報もある。なお，被葬者の年齢区分は，乳児（1 歳未満），幼児（1 ～ 5 歳），小児（6 ～ 11 歳），若年（12 ～ 19 歳），成年（20 ～ 39 歳），熟年（40 ～ 59 歳），老年（60 歳以上）と表記する。また，乳児～若年までを未成人，成年以上を成人と呼ぶ。

分析は，石棺墓・配石墓・土壙墓と甕棺墓とに分けたうえで行う。石棺墓・配石墓・土壙墓については，まず墓を構成する各属性の変異を提示する。つづいて，各属性と時期との関係を検討する。さらに，これをふまえて，墓を構成する属性が何を表すのかを検討する。甕棺墓については，数が限られているので，各属性の特徴を概観するにとどめる。

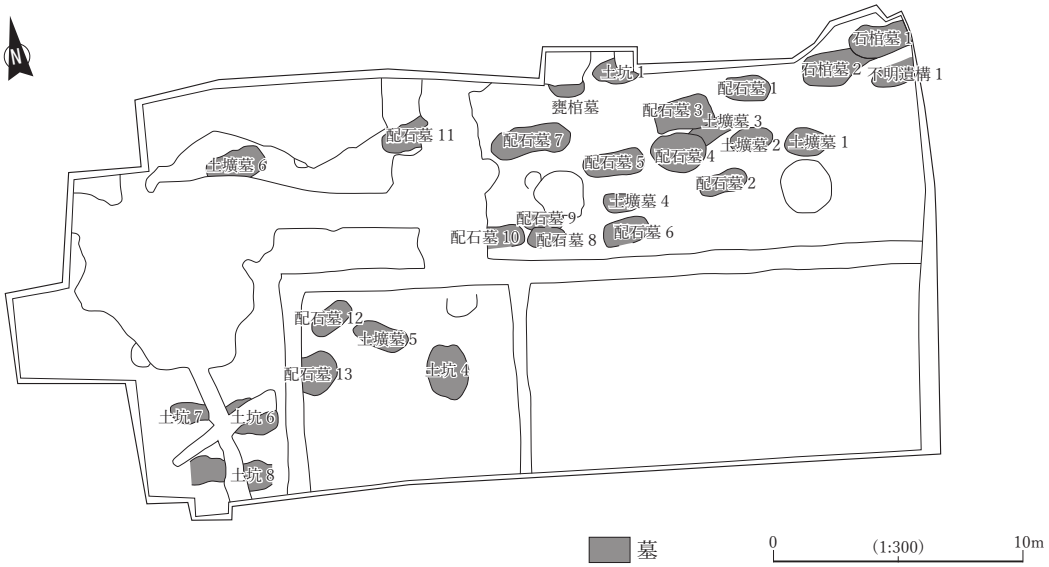


図 5-2　庄・蔵本遺跡第 6 次調査地点
徳大埋文（1998）よりトレース・改変。

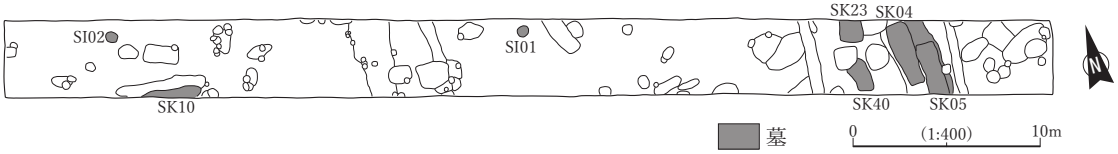


図 5-3　南蔵本遺跡住宅開発工事地点
勝浦（1999）よりトレース・改変。

（1）石棺墓・配石墓・土壙墓

A　属性変異

以下，墓を構成する属性の変異を示す。対象とする墓を構成する属性は，大きく計測的属性と非計測的属性とに分けられる。計測的属性は墓壙の規模，主軸方位，非計測的属性は墓域，墓壙の形態，石を用いた施設，遺物の種類・出土位置，混入物である。計測的属性のうち，主軸方位は出現頻度により類型化し，非計測的属性に変換する。

〔計測的属性〕

墓壙上面での長さ・幅・深さ，墓壙底の長さ・幅，墓壙の主軸方位の三つがある。

〔非計測的属性〕

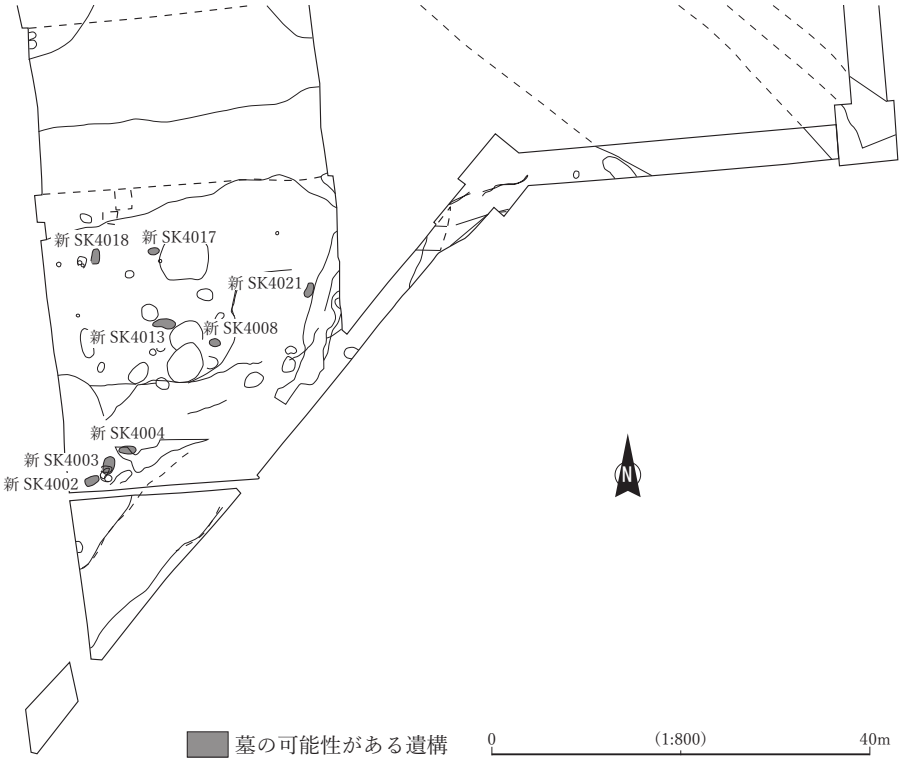
墓域　庄・蔵本遺跡第 6 次調査地点に位置する西墓域，庄・蔵本遺跡第 22 次調査地点・排水管地点・ボイラータンク地点，南蔵本遺跡県立中央病院地点をあわせた東墓域，南蔵本遺跡住宅開発工事地点に位置する西南墓域の三つがある（図 5-1）。

墓壙平面形　隅丸長方形・不整隅丸長方形を含む長方形と，長楕円形・不整長楕円形を含む楕円形の二つがある。

墓壙断面形（短軸）　逆台形を含む箱形と，逆三角形を含む U 字形の二つがある。

墓壙主軸方位　図 5-6 の右図は，360° を 16 分割し，各区分での主軸方位の出現頻度を表したグ

第４遺構面（Ⅰ－１様式～Ⅰ－２様式）



第３遺構面（Ⅰ－３様式）

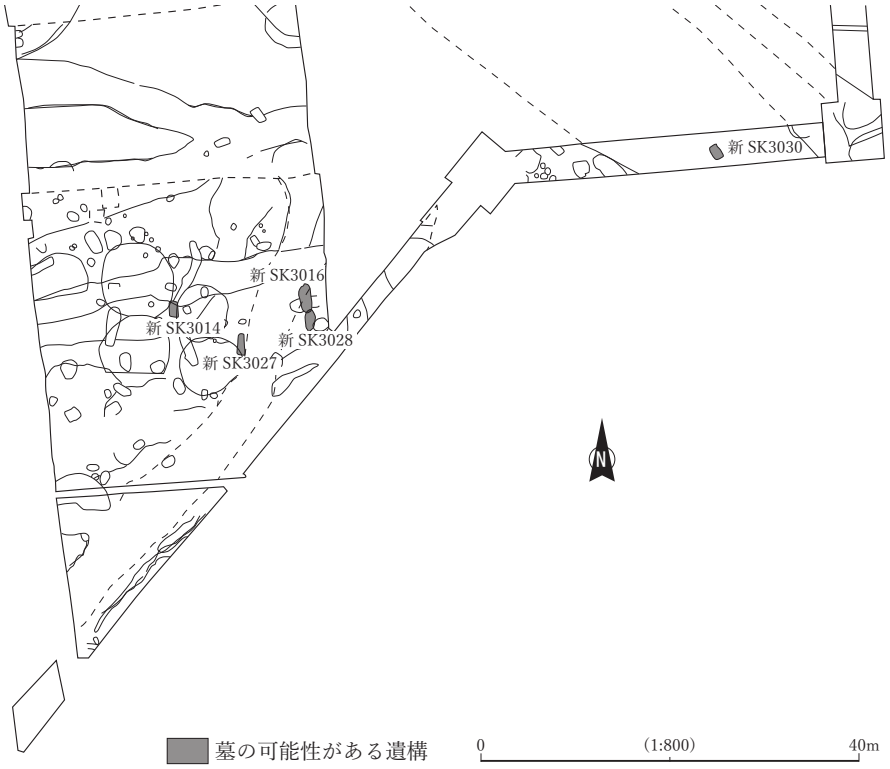


図 5-4　南蔵本遺跡県立中央病院地点

徳島県教委・徳島県埋文（2014）よりトレース・改変。

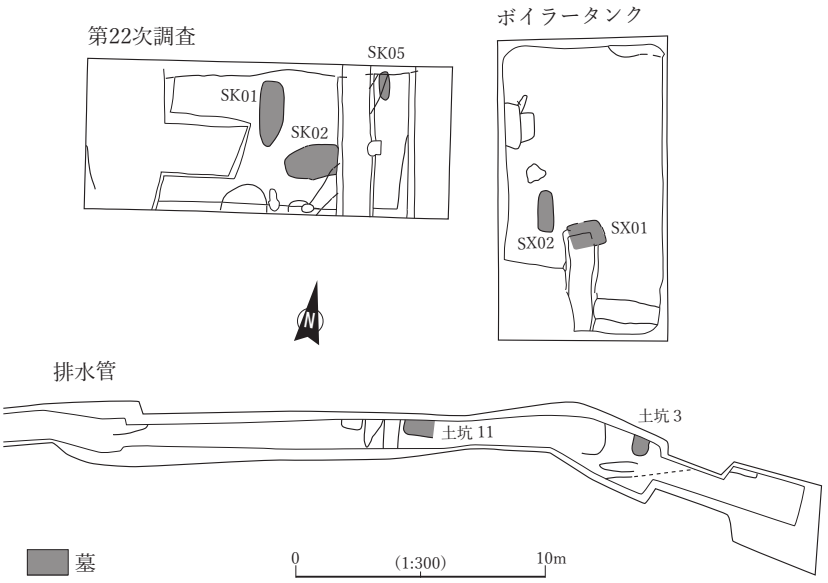
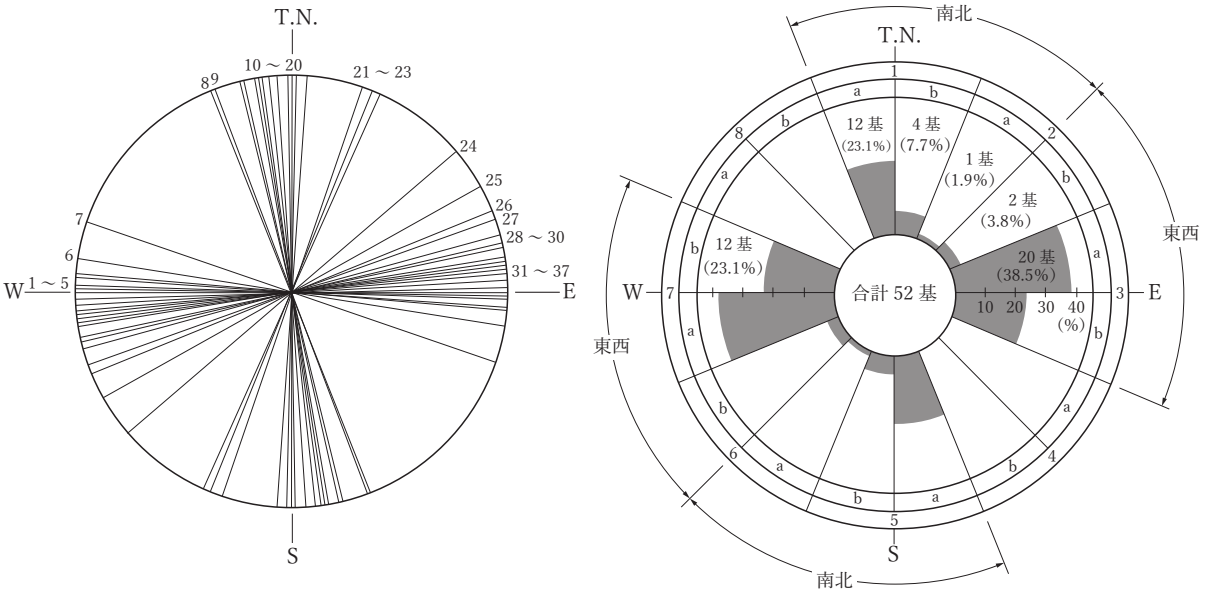


図 5-5　庄・蔵本遺跡 1998 年度立会地点と第 22 次調査地点

徳島県教委・徳島県埋文（2014）よりトレース・改変。



1．６次土壙墓２・６次土壙墓４
2．６次石棺墓２
3．６次配石墓９・６次配石墓 10・中央 4013
4．６次配石墓１・６次配石墓４
5．６次土坑７・６次土坑８
6．６次土坑６
7．６次土壙墓５
8．住宅 SK40
9．中央 SK3030
10．住宅 SK04
11．22 次 SK05
12．６次土坑４・住宅 SK05
13．中央 SK3016
14．22 次 SK01 下層
15．ボイラー SX02
16．中央 SK3014
17．排水管土坑３・中央 SK3028
18．中央 SK3027
19．中央 4018
20．住宅 SK23
21．中央 4003
22．中央 402123．６次配石墓 13
24．６次配石墓 12
25．６次土壙墓３
26．中央 4002
27．６次配石墓２・６次土壙墓６・ボイラー SX01・22 次 SK02 下層
28．６次配石墓３・６次配石墓 11
29．６次配石墓６
30．６次不明遺構
31．６次石棺墓１・６次配石墓７
32．住宅 SK10
33．中央 4008
34．６次配石墓５・６次土坑１
35．排水管土坑 11
36．６次配石墓８・中央 4004
37．６次土壙墓１・中央 4017

６次：庄・蔵本遺跡６次調査地点　ボイラー：庄・蔵本遺跡 1998 年度立会ボイラータンク地点　22 次：庄・蔵本遺跡 22 次調査地点
排水管：庄・蔵本遺跡 1998 年度立会排水管地点　住宅：南蔵本遺跡住宅開発工事地点　中央：南蔵本遺跡県立中央病院地点

図 5-6　墓壙の主軸方位

ラフである。これによれば，区分 1a ～ 2a（5a ～ 6a）と区分 2b ～ 3b（6b ～ 7b）との間に，不連続を見出せる。そこで, 区分 1a ～ 2a（5a ～ 6a）を「南北」, 区分 2b ～ 3b（6b ～ 7b）を「東西」と呼ぶこととする。

石を用いた施設　墓壙内に設置された石棺，配石などの施設である。配石については，すでに北條（1998a）で分類が試みられているが，一部，実際の運用にあたって区別が難しい場合があるため，改めて分類すると以下の通りである（図 5-7)。

石棺：複数の石材を組み合わせて棺をなすもの（６次石棺墓 1，ボイラー SX01)。石を３段ほど積み上げて側壁を造った６次石棺墓１を「石槨」とみなす見解（橋本，2001）もある。しかし，ボイラー SX01 のように，石棺の特徴である長壁・短壁の床面に掘り込みを有する例も確認されていることから，ここではこれらを石棺とみなす。

配石１類：墓壙上面の中心部および外形に沿って石を配置したもの（６次石棺墓２[註 2)])。

配石２類：墓壙底の小口・側辺に石を配置したもの。以下の通り，細分しうる。

2a 類：両小口・両側辺に石を配するもの（６次配石墓 7)。

2b 類：両小口に石を配するもの（６次配石墓 5)。

2c 類：両側辺に石を配するもの（６次配石墓 12)。

2d 類：片側の側辺に石を配するもの（６次配石墓３・11)。

2e 類：片側の小口に石を配するもの（中央新 SK4003）

なお，これらには墓壙中心部に浮いた石を有するものも含む。

配石３類：墓壙上面主軸上あるいは外形に沿って，石を配したもの。以下の通り，細分しうる。

3a 類：主軸上に石を配するもの（６次配石墓１・２・９・10，土壙墓１ほか)。

3b 類：主軸上と外形に沿って石を配するもの（６次配石墓４・６・８ほか）

3c 類：外形に沿って石を配するもの（22 次 SK02 下層)。

なし：石を用いた施設が全く確認されなかったもの。

遺物の種類　壺・甕・高坏・深鉢・鉢・蓋などの土器類，石鏃・石庖丁・台石・砥石などの石器類，管玉からなる玉類の三つがある。

遺物の出土位置　「石の上面」「墓壙底より浮いた位置」「墓壙底近く」「墓壙底より浮いた位置と墓壙底近く」の四つがある。

混入物　炭化物と焼土の二つがある。

これらの属性を各遺構ごとに整理すると，表 5-1 ～ 3 の通りである。

B　各属性と時期との関係（図 5-8）

ここでは，Ⅰ－１・２様式＝Ⅰ期，Ⅰ－３・４様式＝Ⅱ期として，属性ごとの時期的な変化を検討する。

墓域　西はⅠ期だけ，東と西南はⅠ・Ⅱ期の両方があるが，東はⅠ期がやや多く，西南はⅡ期が多いという違いがある。

墓壙平面形　Ⅰ期では楕円が多いが，Ⅱ期になると，長方形がやや多くなる。

墓壙断面形　Ⅰ・Ⅱ期ともに，箱形が多く，変化は看取されない。

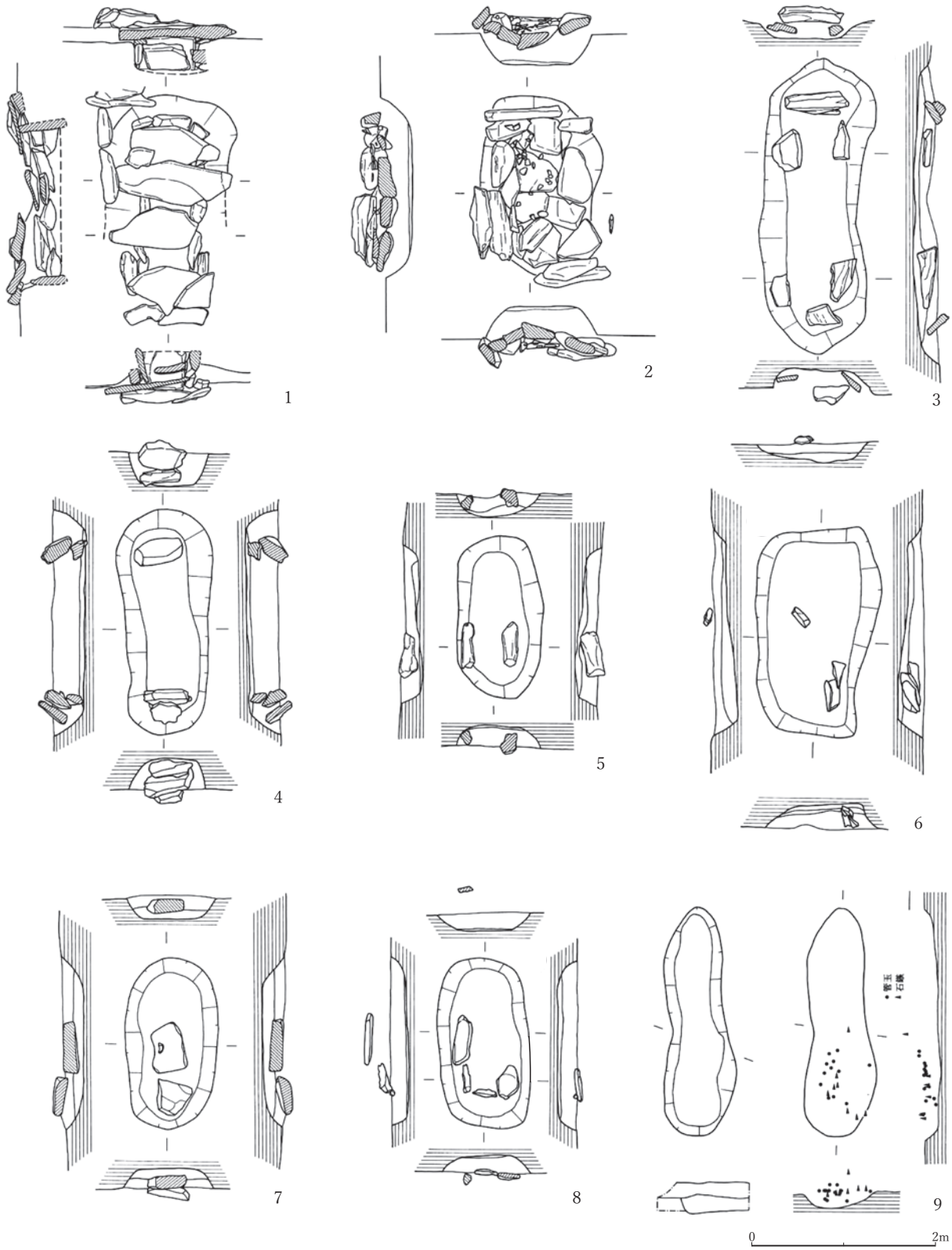


図 5-7　庄・蔵本遺跡第 6 次調査地点における石棺墓・配石墓・土壙墓

1．石棺墓 1　2．石棺墓 2　3．配石墓 7　4．配石墓 5　5．配石墓 12　6．配石墓 3　7．配石墓 1　8．配石墓 6　9．土壙墓 3　徳大埋文（1998）より引用・改変。

表 5-1　石棺墓・配石墓・土壙墓の計測的属性一覧

No.	遺跡	地点	遺構	墓壙上面			墓壙底（石組み内法）		主軸方位
				長さ	幅	深さ	長さ	幅	
1	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓1	252	130	40	(154)	(44)	N81° E
2	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓2	194	126	34	141	80	N89° W
3	庄・蔵本	第６次調査	配石墓1	185	100	24	160	66	N86° W
4	庄・蔵本	第６次調査	配石墓2	186	80	20	170	62	N70° E
5	庄・蔵本	第６次調査	配石墓3	220	120	30	196	96	N75° E
6	庄・蔵本	第６次調査	配石墓4	216	178	18	192	132	N86° W
7	庄・蔵本	第６次調査	配石墓5	240	88	34	200(150)	56	N84° E
8	庄・蔵本	第６次調査	配石墓6	182	98	20	160(130)	78	N77° E
9	庄・蔵本	第６次調査	配石墓7	320	100	24	284(240)	68(46)	N81° E
10	庄・蔵本	第６次調査	配石墓8	148	82	14	120	52	N87° E
11	庄・蔵本	第６次調査	配石墓9	160+	80+	7	142	46+	N88° W
12	庄・蔵本	第６次調査	配石墓10	154+	78	10	142+	52	N88° W
13	庄・蔵本	第６次調査	配石墓11	160+	100	40	146+	70	N75° E
14	庄・蔵本	第６次調査	配石墓12	176	92	24	144	62(40)	N50° E
15	庄・蔵本	第６次調査	配石墓13	150+	150	40	106+	80	N24° E
16	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓1	170	110	20	138	78	N89° E
17	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓2	170	90	10	139	70	N90° W
18	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓3	248	60	18	229	40	N61° E
19	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓4	128	64	12	112	48	N90° W
20	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓5	204	92	14	179	62	N71° W
21	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓6	233	120+	22	182	82	N70° E
22	庄・蔵本	第６次調査	土坑1	192	104	30	152	64	N84° E
23	庄・蔵本	第６次調査	土坑4	208	164	47	88	64	N10° W
24	庄・蔵本	第６次調査	土坑6	216	140	36	172	96	N81° W
25	庄・蔵本	第６次調査	土坑7	152	80	35	132	28	N85° W
26	庄・蔵本	第６次調査	土坑8	352	108	46	132	28	N85° W
27	庄・蔵本	第６次調査	不明遺構	180＋	70	?	?	?	N78° E
28	庄・蔵本	第22次調査	SK01下層	228	88	26	170	60	N8° W
29	庄・蔵本	第22次調査	SK02下層	228	138	42	108	40	N70° E
30	庄・蔵本	第22次調査	SK05	112	48	18	68	24	N13° W
31	庄・蔵本	排水管	土坑3	72+	42	10	52+	22	N1° W
32	庄・蔵本	排水管	土坑11	96+	52+	16	80+	46+	N85° E
33	庄・蔵本	ボイラータンク	SX01	128	98	50	109(95)	75(37)	N70° E
34	庄・蔵本	ボイラータンク	SX02	161	72	59	92	47	N6° W
35	南蔵本	県立中央病院	新SK4002	150	90+	40	107	52	N68° E
36	南蔵本	県立中央病院	新SK4003	205	102	27	163	65	N19° E
37	南蔵本	県立中央病院	新SK4004	178	65+	11	149	53+	N87° E
38	南蔵本	県立中央病院	新SK4008	121	77	11	88	49	N83° E
39	南蔵本	県立中央病院	新SK4013	243	95	24	188	59	N88° W
40	南蔵本	県立中央病院	新SK4017	118	68	23	88	40	N89° E
41	南蔵本	県立中央病院	新SK4018	155	91	9	110	47	N1° E
42	南蔵本	県立中央病院	新SK4021	177	82	17	136	36	N22° E
43	南蔵本	県立中央病院	新SK3014	160	91	10	155	89	N4° W
44	南蔵本	県立中央病院	新SK3016	300	132	32	204	72	N9° W
45	南蔵本	県立中央病院	新SK3027	237	86	22	200	58	N0°
46	南蔵本	県立中央病院	新SK3028	217	100	13	173	54	N1° W
47	南蔵本	県立中央病院	新SK3030	156	94	40	149	85	N21° W
48	南蔵本	住宅開発工事	SK04	340	120	60	316	104	N14° W
49	南蔵本	住宅開発工事	SK05	292+	112	60	264+	80	N10° W
50	南蔵本	住宅開発工事	SK10	300+	60+	80	40+	20+	N82° E
51	南蔵本	住宅開発工事	SK23	116+	128	50	80+	96	N4° E
52	南蔵本	住宅開発工事	SK40	188+	104	40	140+	72+	N22° W

長さ・幅・深さの単位はcm。

表 5-2　石棺墓・配石墓・土壙墓の非計測的属性一覧（1）

No.	遺跡	地点	遺構	時期	墓域			墓壙平面形		墓壙断面形		主軸方位	
					西	東	西南	長方	楕円	箱形	U字	東西	南北
1	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓1	Ⅰ－１・２	○			△		○		○	
2	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓2	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
3	庄・蔵本	第６次調査	配石墓1	Ⅰ－１・２	○				○	○		○	
4	庄・蔵本	第６次調査	配石墓2	Ⅰ－１	○				○		○	○	
5	庄・蔵本	第６次調査	配石墓3	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
6	庄・蔵本	第６次調査	配石墓4	Ⅰ－１・２	○				○	○		○	
7	庄・蔵本	第６次調査	配石墓5	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
8	庄・蔵本	第６次調査	配石墓6	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
9	庄・蔵本	第６次調査	配石墓7	Ⅰ－１・２	○				○	○		○	
10	庄・蔵本	第６次調査	配石墓8	Ⅰ－１・２	○				○			○	
11	庄・蔵本	第６次調査	配石墓9	Ⅰ－１・２	○				△			○	
12	庄・蔵本	第６次調査	配石墓10	Ⅰ－２	○				△			○	
13	庄・蔵本	第６次調査	配石墓11	Ⅰ－１・２	○				△		○	○	
14	庄・蔵本	第６次調査	配石墓12	Ⅰ－１・２	○			○			○	○	
15	庄・蔵本	第６次調査	配石墓13	Ⅰ－１・２	○				○	○			○
16	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓1	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
17	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓2	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
18	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓3	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
19	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓4	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
20	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓5	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
21	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓6	Ⅰ－１・２	○			○		○		○	
22	庄・蔵本	第６次調査	土坑1	Ⅰ－１・２	○				△			○	
23	庄・蔵本	第６次調査	土坑4	Ⅰ－１・２	○				○		○		○
24	庄・蔵本	第６次調査	土坑6	Ⅰ－１・２	○				△		△	○	
25	庄・蔵本	第６次調査	土坑7	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
26	庄・蔵本	第６次調査	土坑8	Ⅰ－１・２	○				○		○	○	
27	庄・蔵本	第６次調査	不明遺構	Ⅰ－１・２	○				○			○	
28	庄・蔵本	第22次調査	SK01下層	Ⅰ－３・４		○			○	○			○
29	庄・蔵本	第22次調査	SK02下層	Ⅰ－１		○		○			○	○	
30	庄・蔵本	第22次調査	SK05	Ⅰ－１～４		○			○		○		○
31	庄・蔵本	排水管	土坑3	Ⅰ－１		○			△				○
32	庄・蔵本	排水管	土坑11	Ⅰ－１～４		○		△		△		○	
33	庄・蔵本	ボイラータンク	SX01	Ⅰ－１・２		○		△		○		○	
34	庄・蔵本	ボイラータンク	SX02	Ⅰ－３		○		○			○		○
35	南蔵本	県立中央病院	新SK4002	Ⅰ－２		○		○				○	
36	南蔵本	県立中央病院	新SK4003	Ⅰ－１		○		○					○
37	南蔵本	県立中央病院	新SK4004	Ⅰ－１		○			○	△		○	
38	南蔵本	県立中央病院	新SK4008	Ⅰ－２？		○			○			○	
39	南蔵本	県立中央病院	新SK4013	Ⅰ－１		○			○			○	
40	南蔵本	県立中央病院	新SK4017	Ⅰ－１		○			○			○	
41	南蔵本	県立中央病院	新SK4018	Ⅰ－２？		○		○					○
42	南蔵本	県立中央病院	新SK4021	Ⅰ－２		○			○				○
43	南蔵本	県立中央病院	新SK3014	Ⅰ－3		○		○					○
44	南蔵本	県立中央病院	新SK3016	Ⅰ－3		○			○				○
45	南蔵本	県立中央病院	新SK3027	Ⅰ－3		○		○					○
46	南蔵本	県立中央病院	新SK3028	Ⅰ－3		○			○				○
47	南蔵本	県立中央病院	新SK3030	Ⅰ－3		○		○					○
48	南蔵本	住宅開発工事	SK04	Ⅰ－２			○	○		○			○
49	南蔵本	住宅開発工事	SK05	Ⅰ－３			○	○		○			○
50	南蔵本	住宅開発工事	SK10	Ⅰ－４			○		○			○	
51	南蔵本	住宅開発工事	SK23	Ⅰ－３			○	△		○			○
52	南蔵本	住宅開発工事	SK40	Ⅰ－３			○	○					○

△は残存部位からの推定。

表 5-3　石棺墓・配石墓・土壙墓の非計測的属性一覧（2）

No.	遺跡	地点	遺構	石を用いた施設					遺物の種類			遺物の出土位置				混入物	
				石棺	配１	配２	配３	なし	土器	石器	玉類	石上	浮	底	浮底	炭化	焼土
1	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓1	○													
2	庄・蔵本	第６次調査	石棺墓2		○				○			○					
3	庄・蔵本	第６次調査	配石墓1				○		○			○					
4	庄・蔵本	第６次調査	配石墓2				○		○			○					
5	庄・蔵本	第６次調査	配石墓3			○											
6	庄・蔵本	第６次調査	配石墓4				○				●			○			
7	庄・蔵本	第６次調査	配石墓5			○											
8	庄・蔵本	第６次調査	配石墓6				○										
9	庄・蔵本	第６次調査	配石墓7			○			○					○			
10	庄・蔵本	第６次調査	配石墓8				○										
11	庄・蔵本	第６次調査	配石墓9				○										
12	庄・蔵本	第６次調査	配石墓10				○		○			?	?	?	?		
13	庄・蔵本	第６次調査	配石墓11			○					○		○				
14	庄・蔵本	第６次調査	配石墓12			○											
15	庄・蔵本	第６次調査	配石墓13				○										
16	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓1				○										
17	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓2					○	○			?	?	?	?		
18	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓3					○		○	○				○		
19	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓4					○									
20	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓5					○	○			?	?	?	?		
21	庄・蔵本	第６次調査	土壙墓6					○									
22	庄・蔵本	第６次調査	土坑1					○									
23	庄・蔵本	第６次調査	土坑4					○									
24	庄・蔵本	第６次調査	土坑6					○									
25	庄・蔵本	第６次調査	土坑7					○									
26	庄・蔵本	第６次調査	土坑8					○									
27	庄・蔵本	第６次調査	不明遺構						○			?	?	?	?		
28	庄・蔵本	第22次調査	SK01下層					○	○	○				○		○	
29	庄・蔵本	第22次調査	SK02下層				○		○				○			○	○
30	庄・蔵本	第22次調査	SK05					○	○			?	?	?	?		
31	庄・蔵本	排水管	土坑3				○		○					○		○	○
32	庄・蔵本	排水管	土坑11					○	○			?	?	?	?		
33	庄・蔵本	ボイラータンク	SX01	○													
34	庄・蔵本	ボイラータンク	SX02				○		○	○		○				○	
35	南蔵本	県立中央病院	新SK4002					○	○						○	○	
36	南蔵本	県立中央病院	新SK4003			○			○					○			
37	南蔵本	県立中央病院	新SK4004					○	○						○	○	
38	南蔵本	県立中央病院	新SK4008				○		○			?	?	?	?		
39	南蔵本	県立中央病院	新SK4013					○	○				○			○	
40	南蔵本	県立中央病院	新SK4017				○		○				○				
41	南蔵本	県立中央病院	新SK4018					○	○			?	?	?	?		
42	南蔵本	県立中央病院	新SK4021					○	○						○	○	
43	南蔵本	県立中央病院	新SK3014					○	○						○		
44	南蔵本	県立中央病院	新SK3016					○	○			?	?	?	?		
45	南蔵本	県立中央病院	新SK3027					○	○			?	?	?	?		
46	南蔵本	県立中央病院	新SK3028					○	○	○		?	?	?	?		
47	南蔵本	県立中央病院	新SK3030					○	○			?	?	?	?		
48	南蔵本	住宅開発工事	SK05					○	○			?	?	?	?		
49	南蔵本	住宅開発工事	SK10					○	○			?	?	?	?	○	
50	南蔵本	住宅開発工事	SK23					○	○	○		?	?	?	?		
51	南蔵本	住宅開発工事	SK40					○	○			?	?	?	?	○	

●は混入の可能性あり。

		墓域			平面形		断面形		石を用いた施設					遺物の種類			遺物の出土位置				混入物		主軸方位	
		西	東	西南	長方	楕円	箱形	U字	石棺	配1	配2	配3	なし	土器	石器	玉類	石上	浮	底	浮底	炭化	焼土	東西	南北
時期	Ⅰ	27	9	1	11	18	13	11	2	1	6	12	15	17	1	2(1)	3	4	4	4	6	2	31	6
	Ⅱ		7	4	6	4	3	1				1	10	11	4		1		1	1	4		1	10

図 5-8　各属性と時期との関係
（　）は混入の可能性あり。

石を用いた施設　Ⅰ期では石棺・配石１～３類・「なし」のすべてが存在し，石棺・配石１～３類をあわせた数が，「なし」の数を上回る。Ⅱ期になると，石を用いたのは配石３類の１例のみで，「なし」がほとんどとなる。すなわち，石の使用から不使用への変化が看取される。

遺物の種類　Ⅰ期では多数の土器に，ごく少数の石器・玉類という構成であったのが，Ⅱ期になると，そこから玉類が欠落する。

遺物の出土位置　Ⅰ期では「石の上面」「墓壙底より浮いた位置」「墓壙底近く」「墓壙底より浮いた位置と墓壙底近く」の四つがみられる。Ⅱ期は出土位置が把握し得た例は「石の上面」「墓壙底近く」「墓壙底より浮いた位置と墓壙底近く」の３例にとどまり，時期的な傾向は不明である。

混入物　Ⅰ期では炭化物・焼土の両者がみられ，炭化物が多い。Ⅱ期では，炭化物だけが確認される。

主軸方位　Ⅰ期では東西・南北の両方がみられるが，東西が多くを占める。Ⅱ期になっても，東西・南北の両方があるが，南北が多くを占めるようになる。すなわち，東西から南北への変化が看取される。

なお，計測的属性である墓壙底の長さ・幅についても，時期との関係を検討したが，有意な結果は得られなかった。

		遺物の種類		
		土器	石器	玉類
石を用いた施設	石棺			
	配１	1		
	配２	2		1
	配３	8	1	(1)
	なし	20	4	1

図 5-9　石を用いた施設と遺物の種類の相関状況
（　）は混入の可能性あり。

		遺物の種類		
		土器	石器	玉類
墓域	西	8	1	2(1)
	東	19	3	
	西南	5	1	

図 5-10　墓域と遺物の種類の相関状況
（　）は混入の可能性あり。

C　墓の属性は被葬者の何を表すのか

石を用いた施設と遺物の種類の相関状況（図 5-9）をみると，土器は石の使用頻度に関係なく，配石１～３類・「なし」で確認される。石器は配石３類・「なし」，玉類は配石２類（3類）・「なし」でみられるが，石の使用頻度の高い石棺・配石１類との結びつきは認められない。こうしたことから，石の使用頻度と土器・石器・玉類のいずれの間にも，明確な相関関係は認めがたく，石を用いた施設，遺物の種類の両者が，被葬者の階層差を表している可能性は低い。

墓域と遺物の種類の相関状況（図 5-10）をみると，西は土器・石器・玉類がみられる一方で，東と西南は三つのうち，玉類が欠落するというように，違いが認められる。これらのあいだの違いは，先に行った分析をふまえれば，時期差によるものも含まれているものと考えらえる。西と東・西南は相互に重複期間を有するが，先述のように，玉類が階層差を表示するとはいえないため，この両者の

あいだで階層差を認めることは難しい。

図5-11は，個々の遺構における墓壙底の規模を示した散布図である。これによれば，分布の粗密により，大小二つの群に分けることができる。小さい方をA群，大きい方をB群と呼ぶとすれば，これらは被葬者の何を反映したものであろうか。

大小の違いを生んだ背景として，容易に想像されるのが，被葬者の身体のサイズと，それに大きく関わる性差，年齢差である。しかし，本稿の対象資料のなかには，遺存した人骨から，被葬者の身体サイズ，性別，年齢を知り得た例は全くなく，これらと墓壙底規模との関係を検討することはできない。そこで，福岡県新町遺跡の調査（志摩町教委，1987）で得られた情報をもとに，この問題に一定の答えを示したい。新町遺跡は，支石墓などの多様な墓制からなる縄文時代晩期後葉～弥生時代前期前葉の墓地で，この時期に属する人骨資料が得られた稀有な遺跡として著名である。

図5-12は，新町遺跡における墓壙底の規模を示した散布図である。この図では，出土人骨により，判明した被葬者の年齢･性別（中橋･永井，1987）を，異なる記号で示している。これによれば，個々の墓は，まず分布の粗密にもとづいて，庄・蔵本遺跡，南蔵本遺跡の場合と同じく，大小二つの群に分けることができる。ここでは小さい方をα群，大きい方をβ群と呼ぶとすれば，α群には成年女性が，β群には熟年男性，成年男性が含まれることがわかる。後の検討で明らかにするように，5～6歳までの乳幼児が土器棺に埋葬されたとすれば，α群は，一部に身体の小さな成人女性を含みつつ，多くは未成人の埋葬からなり，いっぽうのβ群は，成人埋葬におおむね対応する可能性を指摘できよう。

さて，新町遺跡でのα群とβ群との境界は，庄・蔵本遺跡などでのA群とB群との境界とよく似ている。断定することはできないが，新町遺跡で得られた結果を，庄・蔵本遺跡などの例に適用するならば，A群は未成人墓，B群は成人墓におおむね対応しようか。このことをふまえつつ，以下，庄･蔵本遺跡などにおける，墓壙底規模と，石を用いた施設，遺物の種類の関係をみていこう。

図5-13は，墓壙底の規模を，石を用いた施設の類型ごとに異なる記号で示した散布図である。これによれば，A群には配石3類･「なし」が，B群にはこれらに加え，石棺・配石1・2類が含まれることがわかる。先に示したように，A・B群がそれぞれ未成人墓，成人墓に対応するとすれば，石の使用頻度や石の置き方には，被葬者の年齢差が反映されている可能性がある。

図5-14は，墓壙底の規模を，遺物の種類ごとに異なる記号で示した散布図である。これによれば，A群には土器＋石器･土器･「なし」が，B群にはこれらに加え，石器＋玉類が含まれることがわかる。玉類が出土した6次配石墓11は，墓壙が欠損していることから，この図に示されていないが，墓壙の残存長からみて，B群に属するものと考えられる。先に示したように，A･B群がそれぞれ未成人墓，成人墓におおむね対応するとすれば，玉類の副葬には，被葬者の年齢差が反映されている可能性がある。このように，石の使用頻度・置き方，遺物の種類からは，埋葬行為において，階層差よりむしろ年齢区分が強調されたことがうかがえる。

(2) 甕棺墓

甕棺墓は，庄・蔵本遺跡第6次調査地点・第27次調査地点，南蔵本遺跡住宅開発地点の3地点で

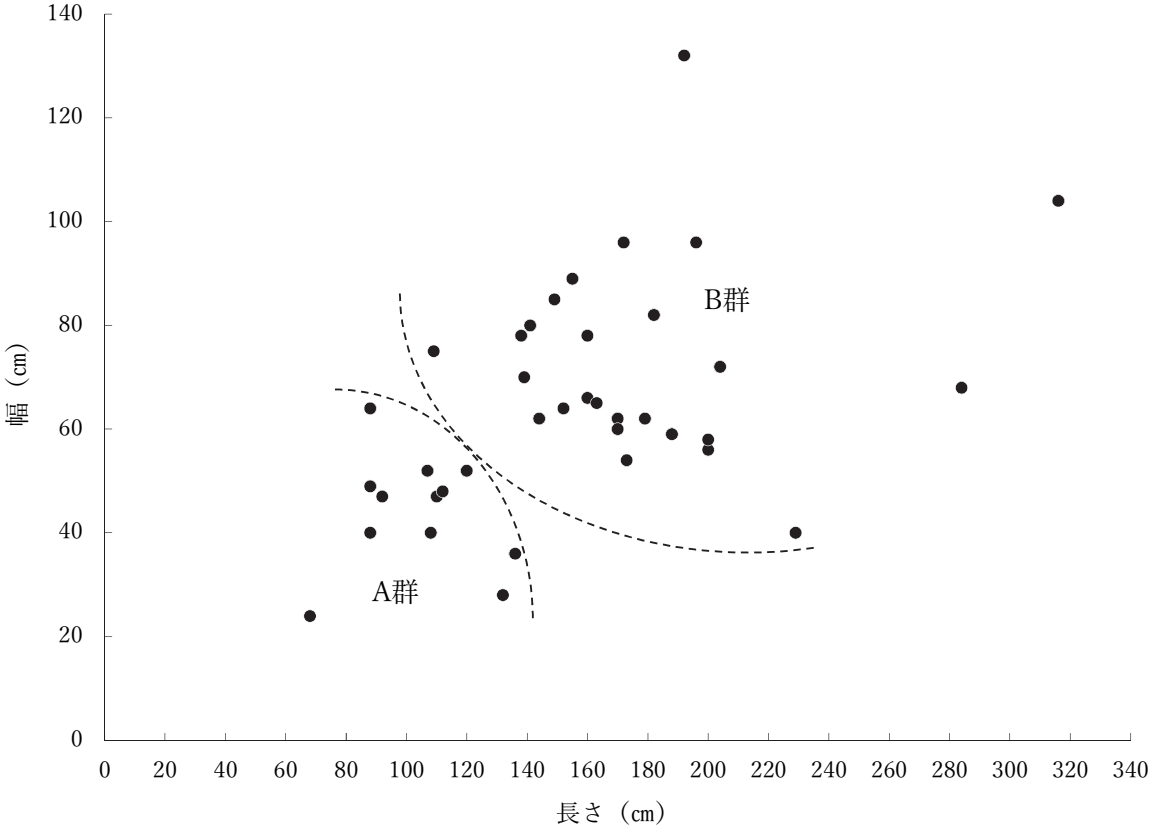


図 5-11　墓壙底の規模

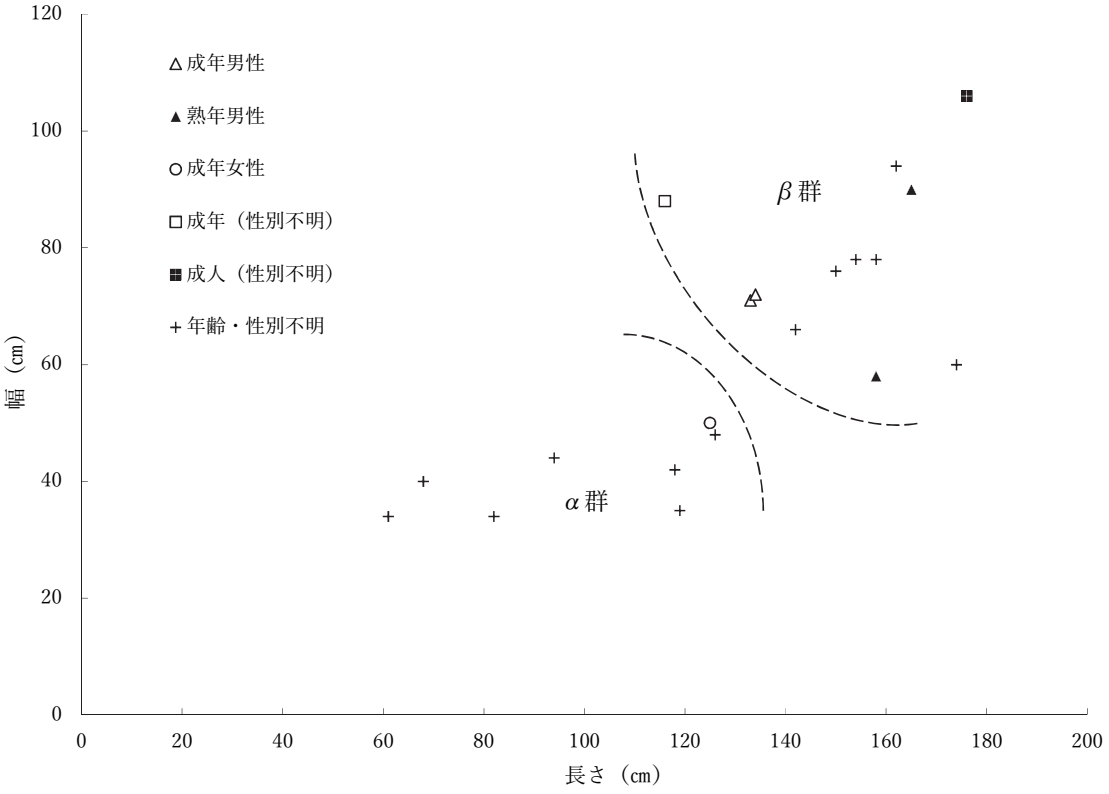


図 5-12　新町遺跡における墓壙底の規模と被葬者の年齢・性別

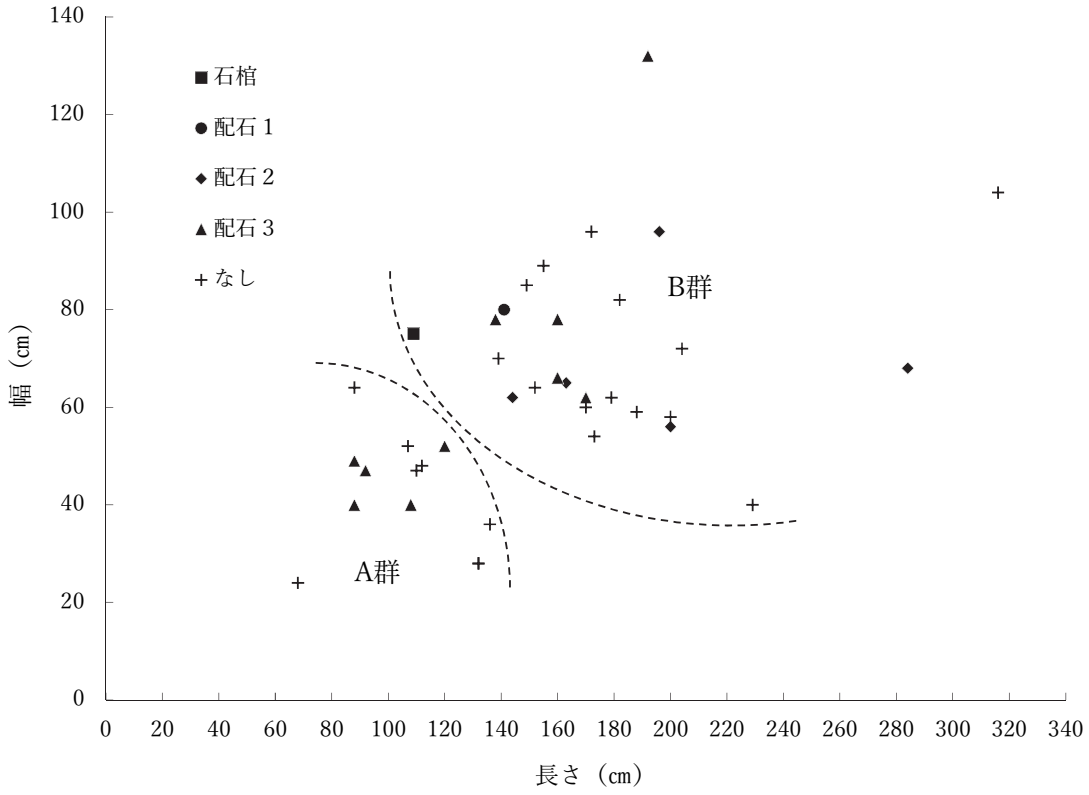


図 5-13　墓壙底の規模と石を用いた施設の相関状況

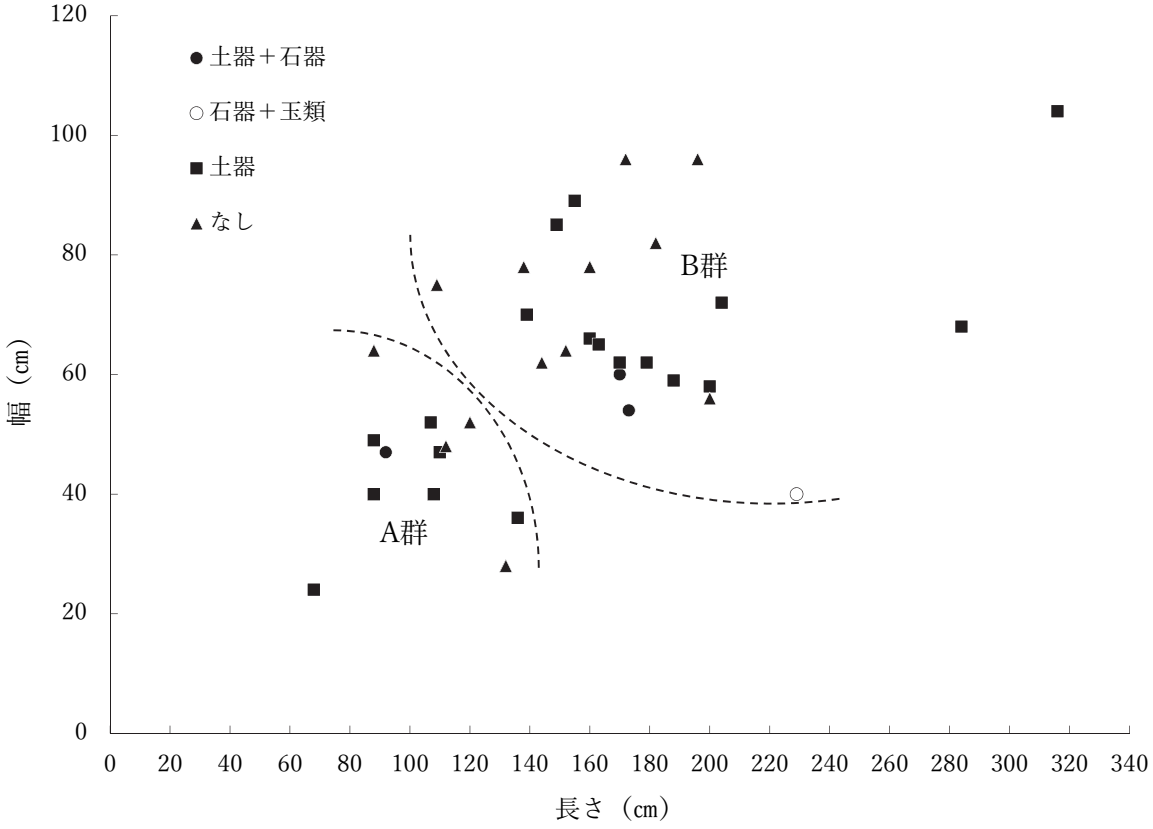


図 5-14　墓壙底の規模と遺物の種類の相関状況

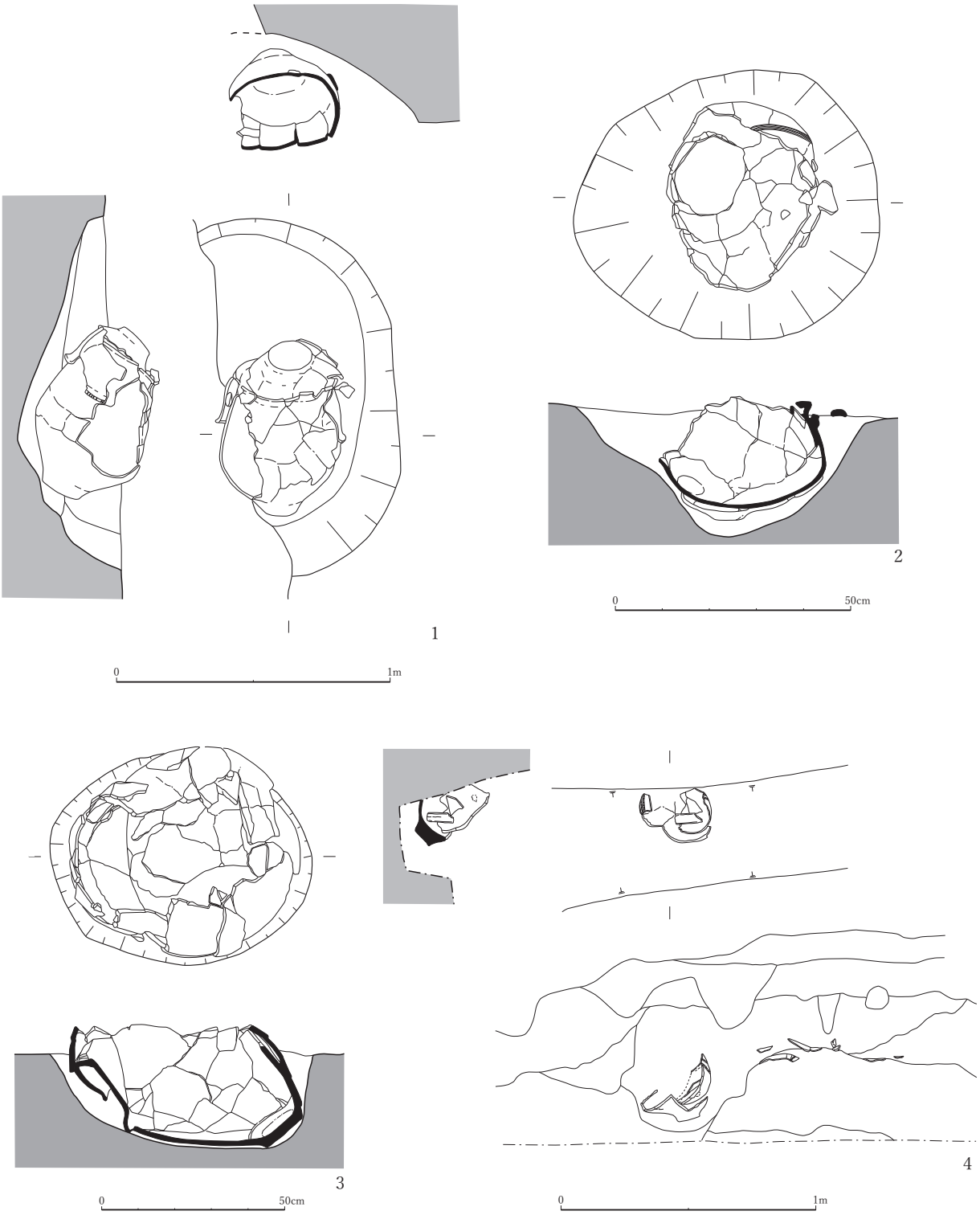


図 5-15　庄・蔵本遺跡一帯における弥生時代前期の甕棺墓

1．庄・蔵本 6 次甕棺墓　2．南蔵本住宅 SI01　3．南蔵本住宅 SI02　4．庄・蔵本 27 次 S1843

1 は徳大埋文（1998），2・3 は勝浦（1999）よりトレース・改変。

表 5-4　甕棺墓の計測的属性一覧

No.	遺跡	地点	遺構	墓壙上面			墓壙底		棺身			主軸方位	埋置角度
				長さ	幅	深さ	長さ	幅	口縁部内径	器高	胴部最大径		
1	庄・蔵本	第６次調査	甕棺墓	129	65+	35	106	54+	31.5	53	45.1	N83°E	29°
2	庄・蔵本	第27次調査	S1843	?	?	?	?	?	(13.4)	30.0+	31	東	42°
3	南蔵本	住宅開発工事	SI01	65	57	26	?	?	(10.2)	40.6+	39.8	N62°W	58°
4	南蔵本	住宅開発工事	SI02	72	57	26	?	?	23.6	62	53.4	N62°W	44°

長さ・幅・深さの単位は㎝。
(　)は残存部の計測値。

表 5-5　甕棺墓の非計測的属性一覧

No.	遺跡	地点	遺構	時期	墓壙平面形	墓壙断面	棺形態	棺器種	出土遺物	備考
1	庄・蔵本	第６次調査	甕棺墓	Ⅰ－１・２	(楕円形)	(U字形)	覆い口	鉢＋壺		松菊里系土器を使用
2	庄・蔵本	第27次調査	S1843	Ⅰ－３	?	?	?	鉢？＋壺＋壺	石剣（石戈）	焼成後穿孔した壺を使用
3	南蔵本	住宅開発工事	SI01	Ⅰ－２	楕円形	逆三角形	?	？＋壺		壺底部片を敷く
4	南蔵本	住宅開発工事	SI02	Ⅰ－１	楕円形	U字形	覆い口	鉢＋壺		

検出されている（図 5-15）。甕棺墓を構成する属性として，ここでは，墓壙の規模，棺身（下甕）に用いた土器の規模，主軸方位，棺身の埋置角度といった計測的属性，墓壙の形態，棺の合わせ方（棺形態），棺に用いた土器の器種，出土遺物といった非計測的属性を取り上げる。これらの属性を各遺構ごとに整理すると，表 5-4・5 の通りである。以下，属性ごとにその特徴を概観する。

墓壙の規模　墓壙上面の長さをみると，６次甕棺墓は，値を把握し得たほかの２例に比べ，大きな値をとることがわかる。これは，棺に用いた土器をどのような角度で埋置したのかということに大きく関わる。すなわち，墓壙上面の長さは埋置角度が小さいほど大きい。

棺身の規模　ここでは，口縁部内径，器高，胴部最大径をあげた。これらはいずれも被葬者の身体サイズに大きく関わる属性であるが，とくに口縁部内径は土器棺被葬者の年齢を考察するうえで，これまでも注目されてきた。福岡県金隈遺跡の甕棺墓出土人骨を報告した中橋孝博らは，甕棺・土器棺の口縁部内径 45 ㎝を，未成人の埋葬と成人のそれとの境界とみた（中橋ほか，1985）。先述した新町遺跡の 18 号墓は，棺内より幼児の歯牙が出土した土器棺墓であるが，棺身は口縁部内径 23.0 ㎝，器高 58 ㎝，胴部最大径 48.6 ㎝を測る（志摩町教委，1987）。また，藤田等（1988）によれば，西北九州の弥生時代の埋葬例では，５～６歳を境界として，乳幼児は土器棺，小児以上は土壙墓・石棺墓・甕棺墓というように，異なる埋葬法が用いられているという。これらをふまえると，棺身の規模からみて，やはりこれらの土器棺墓も乳幼児が埋葬された蓋然性が高いであろう。残存部の内径をあげた 27 次 S1843 と住宅 SI01 は，乳児を埋葬するにしても，その値が小さすぎる。これらが土器棺であるならば，口縁部を大きく打ち欠いたうえで，遺体を収容したものとみなければならない。

主軸方位　いずれもおおむね東西方向をとっている。

埋置角度　先述の通り，墓壙の規模との間に相関がある。

時期　Ⅰ－1からⅠ－3までの幅がある。

墓壙平面形　楕円形だけである。

墓壙断面形　逆三角形とU字形の二者がある。

棺形態　棺身を棺蓋が覆う「覆い口」式だけである。

棺器種　確実なものでは，鉢＋壺の組み合わせがある。

出土遺物　該当するのは，石剣（石戈）が出土した27次S1843の1例だけで，ほかは副葬品とみられる遺物の出土はない。

2．墓制の系譜

さて，これらの墓制の系譜は，どう考えることができようか。結論から言って，これとほぼ同時期に出現する稲作とともに，この系譜は遠く朝鮮半島南部の無文土器文化に求められる。ここで注意しなければならないのは,「求められる」とは言っても, 直接, 徳島地域に伝わったというわけではなく, 北部九州を介しているということである[註3)]。

今日の考古学研究の成果からみて，半島南部の稲作とそれと不可分な関係にある文化は，列島のなかでもまずは北部九州に伝わったとみて間違いない。このときに導入された文化の一つが, 支石墓である。半島南部の支石墓のなかで，列島のものの祖型とみなせるのは，地上に巨大な上石とその周囲に墓域を表示する敷石，地下に多量の石からなる墓室をもつものである。慶尚南道虎灘洞遺跡では，積石からなる墓室の内部から，組み合わせ式石棺のほか，組み合わせ式木棺の痕跡が確認された例や，土層断面より刳り抜き木棺の存在が推定される例が報告されている（東亜細亜文化財，2012）（図5-16）。

こうしたものを祖型とするとはいえ，北部九州の支石墓は，導入当初（縄文時代晩期後葉）から大きく改変されている。佐賀県大友遺跡（九大考研，2001，2003）（図5-17-1），福岡県新町遺跡などの支石墓は，地上に上石こそもつものの，その周囲に敷石はない。地下の墓室は，半島のものに比べ，それほど石を多用しない，あるいは石を使用しないという具合である。また，地上の施設も支石墓の上石とはかけ離れた形態をとる例もある（図5-17-2）。

つづいて弥生時代前期前葉になると，北部九州のなかでも，福岡平野では，弥生独自の墓制，木棺墓がより顕在化する。すなわち，墓壙内に石をもたず，木棺だけを備えた例がより多くを占めるようになる。これは最古の弥生土器, 板付Ⅰ式の成立と時を同じくしている（端野, 2003）。北部九州では, 木棺墓のほかに，福岡県江辻遺跡（粕屋町教委，2002）（図5-17-3），田久松ヶ浦遺跡（宗像市教委，1999）(図5-17-4)，天神森遺跡3次調査（福岡市教委，1996）（図5-17-5）などで，墓壙内に石を配した木棺墓や石槨墓などの墓制が確認されている。乳幼児用の土器棺墓についても，広く普及していることがこれまでの調査で明らかにされている（図5-17-6）。

前項で検討したように，庄･蔵本遺跡一帯の墓制を構成する属性のうち，石を用いた施設は，石棺，配石1～3類の変異が認められた。石棺は，複数の石材を組み合わせ，棺をなすものであるが，石を数段積み重ねて壁体をつくる点に特徴がある。この特徴は，先述した北部九州の石槨墓の壁体にもみられ，これに系譜を求めることは可能である。

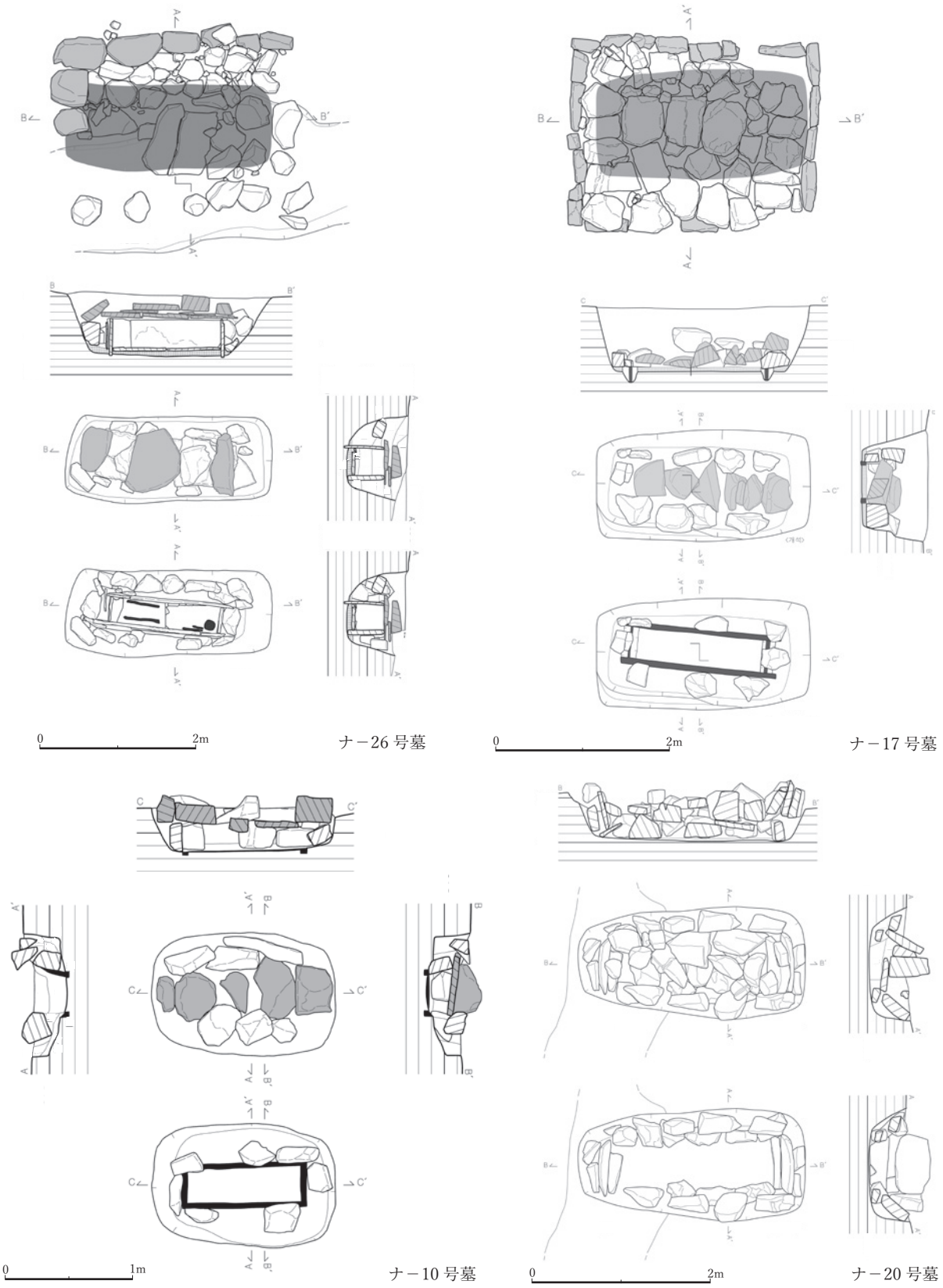


図 5-16　虎灘洞遺跡の石棺・木棺

ナー 26 号墓では組み合わせ式石棺が検出された。ナー 10・17 号墓は組み合わせ式木棺，ナー 20 号墓は刳り抜き式木棺の存在が推定される。東亜細亜文化財（2012）より引用・改変。

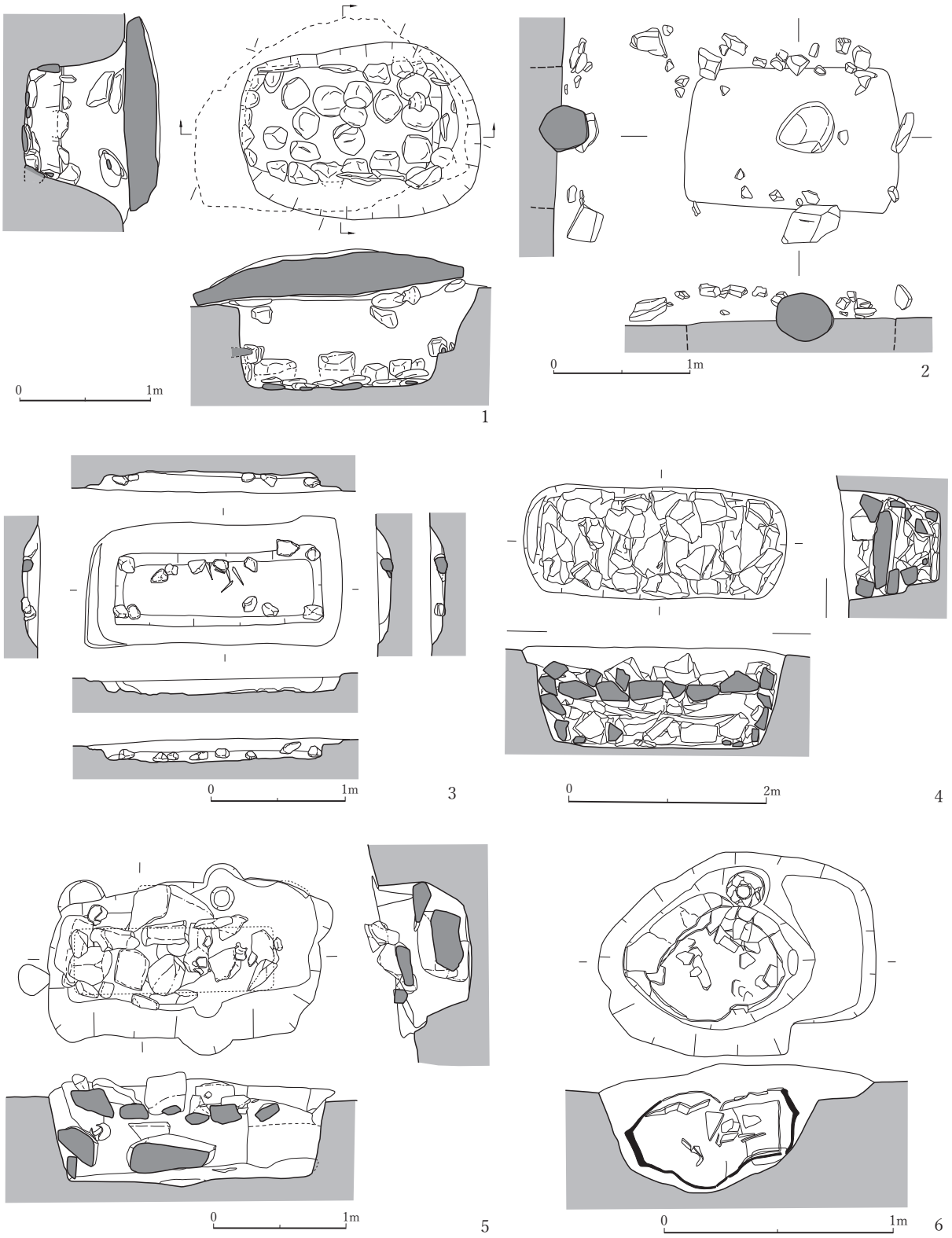


図 5-17　北部九州における縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の墓制

1．大友5次6号支石墓　2．新町43号墓　3．江辻5地点SK20　4．田久松ヶ浦SK218　5．天神森3次4号木棺墓　6．天神森3次27号甕棺墓　各文献よりトレース・改変。

ただし，庄・蔵本遺跡の場合は，床面に掘り込みを有する例も確認されていることから，これ自体が遺体を収容する棺の可能性が高く，内部に木棺が想定し得る石槨墓とは異なる。こうした石槨的な特徴をもつ，弥生時代前期の石棺は，庄・蔵本遺跡のほかでも確認されている。山口県中ノ浜遺跡２～４次調査 E-1 箱式石棺（潮見，1984），同遺跡５～８次調査 G4-3 号石棺（岩崎，1984），梶栗浜遺跡 57 年度調査 c 群石棺（金関，2000）といった響灘沿岸地域の例がそれにあたる。中ノ浜遺跡における石棺の出現は，土器を確実に伴っているわけではないが，付近から出土した土器などからみて，綾羅木Ⅲ式期（弥生時代前期末）とされる（岩崎，1984）。梶栗浜遺跡の石棺も，出土土器からみて，この時期に属するとみなされる（金関，2000）。こうしたことから，これら響灘沿岸地域の石棺は，庄・蔵本遺跡のそれよりも後出するものと判断され，庄・蔵本遺跡の石棺のルーツを響灘沿岸地域に求めることはできない。やはり北部九州の石槨あるいはそれに類する墓室に系譜が求められ，祖型が石槨であった場合は，徳島平野における変容が想定し得ようか。ちなみに筆者は，響灘沿岸の石槨的な要素をもつ石棺の系譜を，北部九州の石槨に求めたことがあるが（端野，2001），この理解に立てば，響灘沿岸地域例と庄・蔵本例とは，親子関係ではなく，兄弟関係にあるといえよう。

つづいて，配石についてはどうか。庄･蔵本遺跡では，配置状態によって大きく１～３類に分類され，さらに２・３類については，それぞれを細分し得た。こうした豊富なバリエーションをもつ配石の系譜もやはり，北部九州の墓制に求められる。先述のように，北部九州に導入された支石墓は，当初より大きく改変され，さらに弥生時代前期前葉にいたると，墓における石の使用頻度は低くなる。こうした過程で，生み出されたのが，墓壙上面や墓壙内で検出された配石であり，これらは支石墓下部構造の墓室を構成する蓋石や積石が変容したものとみなせる。北部九州での石の不使用化傾向は，それを受容した庄・蔵本遺跡一帯でもそのまま引き継がれ，その変化は北部九州よりも遅れた弥生時代前期中葉から末葉にかけて生じている。

こうした配石とともに，徳島平野に伝わったとみられるのが木棺である。庄・蔵本遺跡一帯では，現在のところ，棺材自体の検出例はないが，墓壙の平面形，断面形や土層断面からみて，その存在が推定し得る。墓壙平面形が長方形のもの，墓壙断面形が箱形のものは，内部に木棺が存在した可能性がある。とくに墓壙断面箱形は，組み合わせ式木棺が存在した可能性を示す。福永伸哉（1985）の分類でいうⅠ型（墓壙床面の短辺部に小口板を固定させるための溝状の掘り込みを有するもの）の存在は，未確認である。墓壙断面 U 字形のものについても，刳り抜き式木棺であれば，その可能性を想定し得る。ただ，すべての墓に，木棺が存在したかというとそうではなく，墓壙平面形が不整な長楕円形である例も存在することから，遺体収納容器を設置しない素掘りの土壙墓が，木棺墓とともに存在したと考えるのが，より自然ではないだろうか。ともかく，こうした組み合わせ式木棺，刳り抜き式木棺の両者は，北部九州でもその存在が確認されており，土器・玉類などの副葬習俗ともに，ここにルーツを求めることができよう。

甕棺墓もまた，北部九州にルーツを求め得る。棺身を墓壙底に沿わせ斜位に埋置する，鉢と壺を組み合わせて棺をなす，棺身を棺蓋が覆うといった特徴は，北部九州の乳幼児甕棺墓の中にも見出せる。したがって，徳島平野では，石棺墓・配石墓・木棺墓といった小児以上用の墓制と，乳幼児用の墓制である甕棺墓とが複合したかたちで受容されたとみなせる。

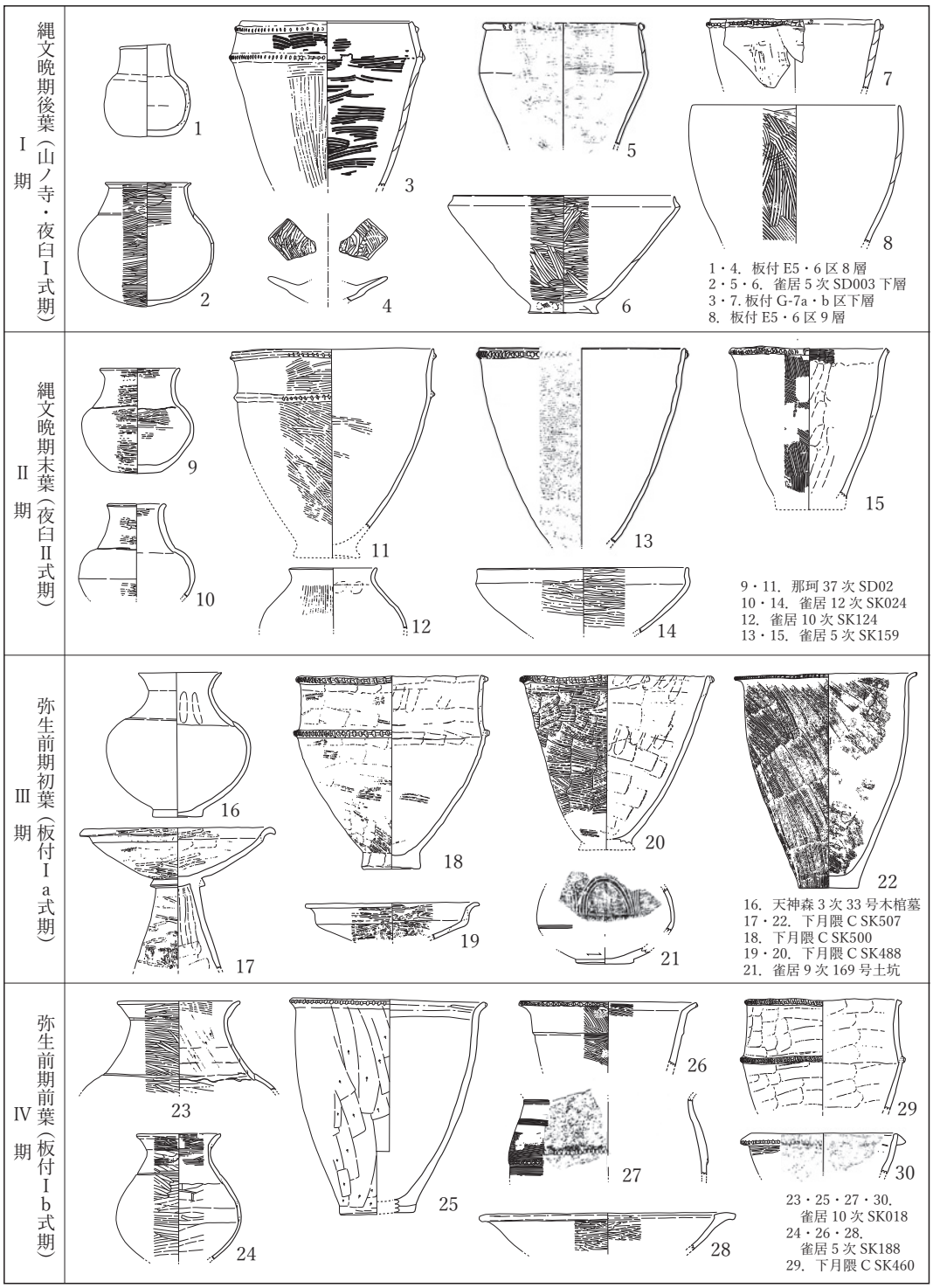


図 5-18　北部九州における弥生時代開始前後の土器編年

縮尺は 1/8。端野（2016）より引用・改変。

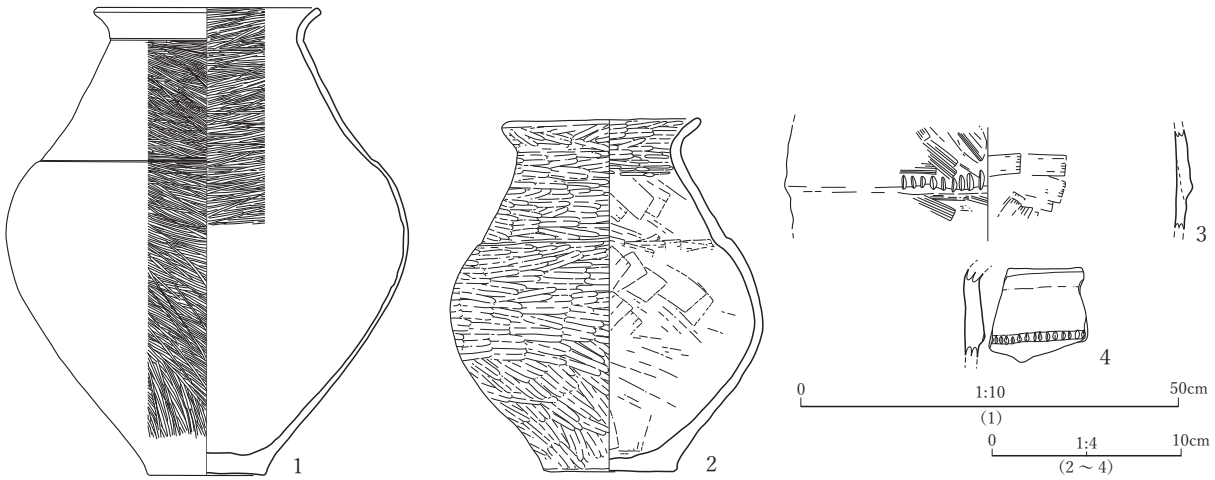


図 5-19　庄・蔵本遺跡一帯最古の弥生土器

1．南蔵本住宅 SI02　2．庄・蔵本 1998 年度立会排水管土坑 3　3．庄・蔵本 10 次溝 1　4．庄・蔵本 22 次 SK02

1 は勝浦（1999），3 は徳大埋文（1998）よりトレース・改変。

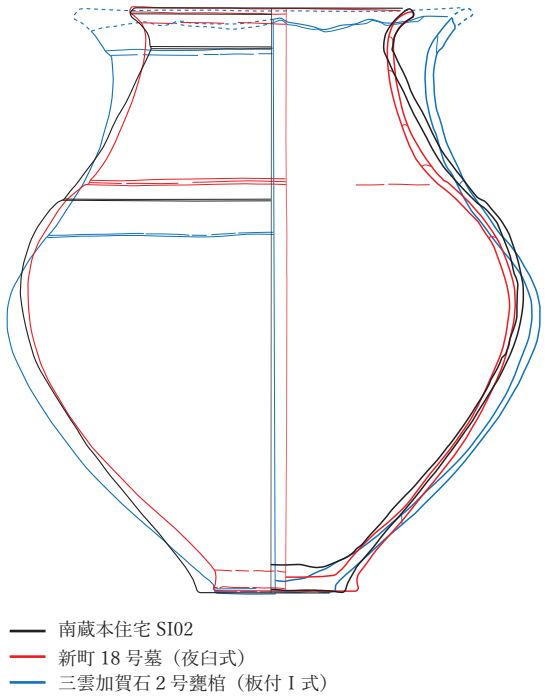


図 5-20　大形壺の形態比較

南蔵本例の縮尺は 1/8。他の 2 例は南蔵本例の高さに合うよう全体のサイズを調整した。新町例，三雲加賀石例の時期は橋口（1992）の甕棺編年による。

こうした北部九州の多様な墓制は，板付 I 式土器の広域伝播の波に乗って，列島西部各地へと広がるものと考えられる。徳島地域はそのうちの一つである。従来より，板付 I 式の壺と甕に近似する土器が，列島西部で点的に分布していることが知られるが（田中，1986 ほか），これが庄・蔵本遺跡一帯でも出土しているという事実は強調しておいた方が良かろう。

北部九州における弥生時代開始前後の土器編年の妥当性に疑問をもった筆者は，先学の成果に学びつつ，「一括資料の非直列的配列」を用いて，これを再検討した（端野，2016）。図 5-18 はその結果の一部であるが，このなかのⅣ期（板付 I b 式期）が，列島西部への広域拡散期にあたる。この時期の壺・甕に類似するものが，庄・蔵本遺跡第 10 次調査地点（酵素科学研究センター地点）（徳大埋文，1998），1998 年度立会調査地点（排水管）[註 4)]，第 22 次調査地点，南蔵本遺跡住宅開発工事地点などで出土している（図 5-19）。ここで，北部九州と徳島平野の土器群を結びつけるのは，頸部と胴部の境界に段を有する壺，胴部上半に段を有する甕である。とくに庄・蔵本遺跡第 22 次調査 SK02 のそれは，庄・蔵本遺跡における弥生土器の最古段階である I － 1 様式（古）（中村，2002）の基準資料に位置づけられ（中村，2010），重要な資料である。また，南蔵本遺跡住宅 SI02 の大形壺は，肩の張り方において，板付 I 式の三雲加賀石例よりむしろ夜臼式の新町例に近く，かつ口頸部下と頸胴部境界とに段を有する点は，板付 I 式の特徴を備えている（図 5-20）。したがって，

これを徳島平野の遠賀川式土器の中でも，最古の部類に属するものとみてよかろう。

列島西部において，こうした土器が出土する遺跡は，稲作適地である低湿地のすぐそばに立地する点で共通する。庄・蔵本遺跡の墓制は，稲作とともに，北部九州から直接的に伝わったとみてよいではないか。そして，こうした文化の受容は，Ⅰ－１様式における突帯文土器と遠賀川式土器の共存現象が物語るように，北部九州からの移入者と，それまでに居住していた在来者との共住（一つの居住域を共有）のなかで平和裏に起きたのではないか[註5)]。

図 5-21　集落と出自集団
キージング（1975）より引用。

３．墓からみた社会

最後に，庄・蔵本遺跡の墓あるいは墓域のあり方から，当時の社会像について，新進化主義の文化人類学者・サーヴィス（1971）の社会類型を用いて，言及しておきたい。これは，人類の社会が統合の度合いによって，バンド社会・部族社会・首長制社会・国家の４つに分類され，バンド社会から国家へと向かうにつれ，社会の成層化･複雑化が進み，かつ統合の度合いが高まるというものである。

まず，庄・蔵本遺跡一帯の弥生時代前期集落が，定住した稲作農耕民のものであったことは，これまでの調査成果からみて，明白である。これを階層社会の所産とみなす見解（北條, 1998b）もあるが，前々項での分析結果によれば，石を用いた施設，遺物の種類，墓域といった各属性において，階層差の明確な表示は認められなかった。そして，墓壙底の規模と，石を用いた施設，遺物の種類とのあいだの関係からは，石の使用頻度や石の置き方，玉類の副葬に，被葬者の年齢差が反映されている可能性がうかがえた。すなわち，この集落では，埋葬行為において，階層差よりもむしろ年齢区分が強調されたものとみられる。こうしたことから，当時は平等原理にもとづいた部族社会であった可能性が高い。

では，同時期に複数存在する墓域は何を意味するのか。部族社会における一つの集落は，複数の異なる出自集団の分節からなると考えられる。ここでの出自集団とは，文化人類学では氏族あるいはクランと呼ばれ，共通の祖先・系譜観念をもち，外婚の単位となるものである。さらに，同じ平野や隣接する地域まで見渡すと，同じ系統の出自集団の分節が，他の集落に居住するというかたちをとる（図5-21）。これら複数の集落が，共通した祭祀や部族意識によって，一つに結合されるような社会が部族社会である。一集落に，複数の出自集団の分節（サブクランあるいはリネージ）が居住するというあり方は，異なる出自集団の分節間で婚姻関係を結ぶことを可能にし（キージング，1975），人間集団の再生産には好都合である。庄・蔵本遺跡での個々の墓域は，こうした出自集団の分節を表示しているのではないだろうか[註6)]。Ⅰ－１様式～Ⅰ－２様式において，庄・蔵本遺跡一帯の微高地上に，複数の居住域が同時併存したことが，近藤玲（2017）により示されている。個々の居住域は，墓域

と対応関係にあるものとみられ，その背後にはやはり出自集団の分節の存在を想定し得よう。

第２節　調査成果のまとめ

最後に，各調査地点に関する報告内容をまとめ，本書の結びとしたい。

ボイラータンク地点（1998 年度立会）　１面の遺構面が調査され，弥生時代前期の墓２基，土坑２基，焼土遺構１基，溝３条が確認された。なかでも，石棺墓・土壙墓といった遺構は，当時の埋葬習俗を知ることができる貴重な資料であり，同時に，この辺り一帯が墓域であったことを示している。これらの資料は，前節でも若干の検討を試みたが，第６次調査地点での成果につづき，徳島平野における弥生墓制起源論，あるいは弥生前期社会論に大きく貢献するものと考えられる。遺物は，弥生時代前期の壺・甕形土器や石斧・石庖丁・石皿・敲石・磨石などの様々な石器が遺構・包含層から出土した。

第 22 次調査地点（西病棟新営その他電気設備地点）　３面の遺構面が調査され，弥生時代前期の土壙墓３基，溝１基，土坑２基，古墳時代中期以降の溝１基，土坑１基，近世以降の溝１基などが確認された。第１～ 1.5 遺構面で検出された３基の土壙墓は，隣接するボイラータンク地点と同様，埋葬習俗の資料として重要であり，この辺りが墓域であったことを証明するものである。出土遺物には，弥生時代前期の壺・甕形土器，粗製剥片石器，敲石といった石器，瓦質土器，大谷焼，瀬戸・美濃系・関西系の近世陶磁器などがある。とりわけ，SK02 出土土器群は，徳島平野における弥生土器編年の最古段階であるＩ－１様式（古）の基準資料であり，かつ三谷遺跡や列島東部との関係を暗示する横型流水文土器を含んでおり，重要である。

第 30 次調査地点（渡り廊下建設地点）　３面の遺構面が調査され，弥生時代前期中葉の溝状遺構３基，弥生時代前期～近世以降の土坑・ピット４基，弥生時代前期～中世の不明遺構２基，近代以降の溝状落ち込み１基が確認された。第３遺構面で検出された溝状遺構の機能については，用水路の末端部と畑の畝間といった二つの可能性を指摘し得るが，いずれが妥当かは今後の調査に委ねられる。

（端野晋平）

註

１．南蔵本遺跡県立中央病院地点の第３・４遺構面で検出された遺構のうち，土坑の形態，埋土の堆積状況，石の出土状況からみて，墓の可能性が高い例を分析対象として抽出した。なお，同地点の出土遺物については徳島県埋蔵文化財センター，住宅開発工事地点のそれについては徳島市教育委員会からのご厚意により，実見することができた。感謝の意を表す次第である。

２．「石棺墓」という名称は与えられているものの，実際は石蓋土壙墓（木棺墓）である（北條，1998a）。

３．異論に対する批判はすでに終えているので（端野，2015，2017a），ここでは振り返らない。

４．未報告。

５．ここでいう共住は，中村豊が庄・蔵本遺跡と三谷遺跡との関係にみた「共生」（中村，1998，2002）とは異なる。端野（2017b）では，誤解していたので訂正する。

６．日本考古学界で，こうした概念を前面に出して，列島先史社会を論じ始めたのは，田中良之（1998，2000）である。本稿はこうした業績に倣うものである。

文献

（日本語）

岩崎卓也，1984．3. 中ノ浜遺跡の調査－東京教育大学－ . 豊浦町教育委員会（編），史跡中ノ浜遺跡保存管理計画策定報告書．豊浦町教育委員会，豊浦．pp. 19-42.

粕屋町教育委員会，2002．江辻遺跡第5地点 . 粕屋町教育委員会，粕屋.

勝浦康守，1999．南蔵本遺跡（住宅開発工事）. 徳島市教育委員会（編），徳島市埋蔵文化財発掘調査概要9．徳島市教育委員会，徳島．pp. 1-25.

金関恕，2000．梶栗浜遺跡 . 山口県（編），山口県史資料編考古1．山口県，山口．pp. 324-327.

キージング（Keesing,R.M.）（小川正恭・笠原政治・河合利光訳），1975．Kin Groups and Social Structure（親族集団と社会構造）．未来社，東京.

九州大学考古学研究室，2001．佐賀県大友遺跡 . 九州大学考古学研究室，福岡.

九州大学考古学研究室，2003．佐賀県大友遺跡Ⅱ . 九州大学考古学研究室，福岡.

近藤玲，2017．四国東部における灌漑水田農耕の受容期の年代について．総研大文化科学研究 13，149-193.

サーヴィス（Service,E.R.）（松園万亀雄訳），1971．Primitive Social Organization: An Evolutionary Perspective（未開の社会組織－進化論的考察－）．弘文堂，東京.

潮見浩，1984．中ノ浜遺跡の調査－広島大学－ . 豊浦町教育委員会（編），史跡中ノ浜遺跡保存管理計画策定報告書．豊浦町教育委員会，豊浦．pp. 13-18.

志摩町教育委員会，1987．新町遺跡 . 志摩町教育委員会，志摩.

田中良之，1986．縄文土器と弥生土器 1. 西日本 . 金関恕・佐原眞（編），弥生文化の研究 3．雄山閣出版，東京．pp. 115-125.

田中良之，1998．出自表示論批判．日本考古学 5，1-18.

田中良之，2000．墓地からみた親族・家族 . 都出比呂志・佐原眞（編），古代史の論点 2．小学館，東京．pp. 131-152.

徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター，2014．南蔵本遺跡－県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書－ . 徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター，徳島.

徳島大学埋蔵文化財調査室，1998．庄・蔵本遺跡 1. 徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島.

中橋孝博・土肥直美・永井昌文，1985．金隈遺跡出土の弥生時代人骨 . 福岡市教育委員会（編），史跡金隈遺跡．福岡市教育委員会，福岡．pp. 43-145.

中橋孝博・永井昌文，1987．福岡県志摩町新町遺跡出土の縄文・弥生移行期の人骨 . 橋口達也（編），新町遺跡．志摩町教育委員会，糸島．pp. 87-105.

中村豊，1998．稲作のはじまり－吉野川下流域を中心に－ . 東潮（編），川と人間－吉野川流域史－．渓水社，広島．pp. 79-100.

中村豊，2002．縄文から弥生へ－眉山北麓遺跡群の分析から－ . 徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島．pp. 245-258.

中村豊，2010．庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 . 徳島大学埋蔵文化財調査室（編），年報2．徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．pp. 11-21.

橋口達也，1992．大形棺成立以前の甕棺の編年．九州歴史資料館研究論集 17，19-40.

端野晋平，2001．支石墓の系譜と伝播様態 . 田中良之（編），弥生時代における九州・韓半島交流史の研究．九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座，福岡．pp. 29-62.

端野晋平，2003．支石墓伝播のプロセス－韓半島南端部・九州北部を中心として－．日本考古学 16，1-25.

端野晋平，2015．近年の弥生時代開始期墓制論の検討．古文化談叢 74，95-129.

端野晋平，2016．板付Ⅰ式成立前後の壺形土器－分類と編年の検討－ . 田中良之先生追悼論文集編集委員会（編），考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集．中国書店，福岡．pp. 325-349.

端野晋平，2017a．中村大介著「支石墓の多様性と交流」に対するコメント．長崎県埋蔵文化財センター研究紀要 7，59-71.

端野晋平，2017b．墓制からみた弥生時代の始まり－徳島地域をケースとして－．地方史研究 67(4)，4-8.

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治，2015．庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場地点）の成果．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1，43-97.

橋本達也，2001．弥生時代前期朝鮮系無文土器の展開と徳島．青山考古 18，167-176.
福岡市教育委員会，1996．下月隈天神森遺跡Ⅲ . 福岡市教育委員会，福岡.
福永伸哉，1985．弥生時代の木棺墓と社会．考古学研究 32(1)，81-106.
藤田等，1988．北部九州弥生時代未成人埋葬について . 永井昌文教授退官記念論文集刊行会（編），日本民族・文化の生成１永井昌文教授退官記念論文集．六興出版，東京．pp. 573-603.
北條芳隆，1998a．第６次調査の記録 . 徳島大学埋蔵文化財調査室（編），庄･蔵本遺跡１．徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．pp. 15-55.
北條芳隆，1998b．弥生時代前期集団墓の構造 . 徳島大学埋蔵文化財調査室（編），庄・蔵本遺跡１．徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．pp. 133-141.
宗像市教育委員会，1999．田久松ヶ浦 . 宗像市教育委員会，宗像.
（韓国語）
東亜細亜文化財研究院，2012．晋州 虎灘洞 先史遺跡．東亜細亜文化財研究院，昌原.